

アートとまちの新しい関係

～私的空間をまちに公開する取り組み～

堀内 研自

スペース的

アート

の活かし方

近年、アートを活用したまちづくりが各地で人気を集めている。瀬戸内海の直島や越後妻有などは代表的な事例であるが、今回紹介する事例は非常に私的な取り組みである。個人レベルで私的なコレクションや空間を一般に公開し、アートを楽しもうとする取り組みである。これらの行為は、公でも私でもない微妙な関係の中にあることで、アートを通して新しいコミュニティを生み出す可能性を見せてくれる。



外観は土壁風の壁が特徴



ギャラリースペース



外観は普通のお寺



外陣の天井は全て作品



シンプルな外観



スキップフロアーで2階へ

本格的なギャラリー喫茶室を備えた住宅「ギャラリー茶房・兎夢（とむ）」は、その名の通りギャラリーと喫茶室が一体となったスペースで、奥にあるオーナー夫妻が暮らす住宅と一体的に設計されている。平屋の建物は周囲を壁で囲まれ、外からはあまり中の様子が分からないが、細いアプローチを抜け、室内に入ると広い中庭に囲まれた明るい空間に導かれる。この茶房を運営するご婦人は、役所を引退後、喫茶店経営の勉強をし、この家を建てて開業したそうだ。公務員の仕事をしていたときはとても忙しかったので、今はマイペースでギャラリーや喫茶店の運営を楽しんでやっているとのこと。はじめたきっかけは、人が好きだったからという。もともと友達が多く、今でも特に宣伝をしているわけではないがそうした昔のつながりで、お客さんが口コミで



兎夢：内部 開放的な中庭で贅沢な時間を過ごすことができる。

やってくるそうだ。ギャラリーは一般にも貸し出してあり、訪れたときはクリスマス用のブリザードフラワーが展示されていた。常連さんは一人で来る方が多い。オーナー夫人こだわりのお茶とお菓子のおもてなしで、アート鑑賞をしたり会話を楽しんだり、ゆったりとした時間を過ごす空間である。

お寺でコンテンポラリーアートを飾る 光明寺は外から見ると普通のお寺であるが、一歩中へ入ると現代アートで埋め尽くされた空間に圧倒される。本堂の壁や天井はもとより、本尊を安置する内陣まで作品が飾られている。こうした作品群は住職が六、七年前から集め始めたものだそう、作品を飾ることへの追求が本堂をミュージアムに変えてしまったそうだ。訪れたときは施工中であったが、



光明寺：内陣 現代アートと仏教建築のコラボレーション

外陣の天井一面にはめ込まれる岡崎出身の三浦篤正氏の作品は圧巻で、天井全体が青くやわらかい霞のようなもので揺らいでいるかのように見える。現代アートは白くて何もない空間に展示するものだと思っていたが、仏教建築とのコラボレーションにより新しい空間を生み出している。光明寺は平成二十四年の「光明寺コンテンポラリーアートミュージアム」開設をめざし、現在準備を進めている段階で、見学するには予約が必要となる。間もなく完成する外陣の天井を住職がどう演出し参拝者に見せてくれるか、次回訪れる時が楽しみである。

日常的な生活スペースと非日常的なギャラリースペースの共存を目指した住宅 最後に紹介するのは、筆者の自邸である。この家は住宅部分の床面積約三十五

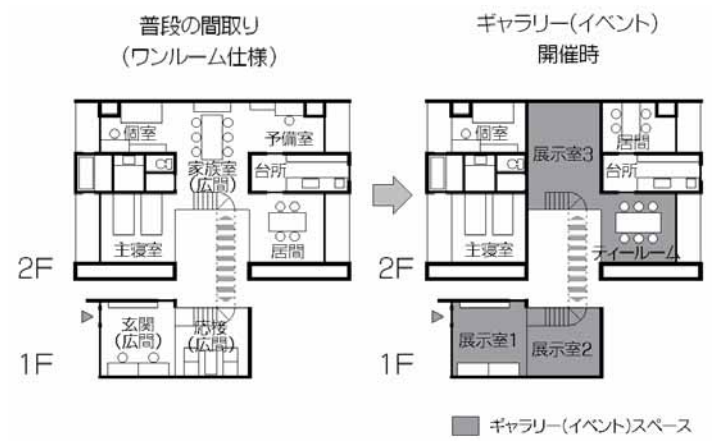


自邸：内部 やわらかい自然光を取り入れた広間空間

「アートとまちの新しい関係」の連載は控えめです。訪れたい方は、スペースまでお問い合わせ下さい。

なお、今回紹介した事例は私的なスペースを使用しているため、詳しい情報の掲載は控えめです。訪れたい方は、スペースまでお問い合わせ下さい。

坪の内、二十坪が個室や居間、水廻り等の私的な生活スペースとなっている。残りの十五坪は玄関や階段を含んだ「広間」と呼ぶ公的なスペースで、さまざまな人が訪問することを前提にプランニングされている。「広間」と生活スペースは引き戸により繋がったり切り離したりすることができるため、普段は開けて開放的なワールームとして生活し、ギャラリー開催時には個室は閉じてプライバシーを確保するとともに、家具や小物なども個室に入れてしまえば、生活感のない非日常的なギャラリースペースを生み出すことが可能である。ギャラリースペースには自然光を効果的に採り入れることで、一日の光の変化が、アート作品をより一層魅力的に見せる演出も施した。この家のオープンハウス時には知り合いのギャラリーの紹介で豊橋出身の鈴木淳夫氏の展覧会を開催した。空間に作品を飾ることも、作家や鑑賞に来る方とのふれあいもとても楽しく、今後も年に一、二回は開催したいと思っている。



自邸：変化する間取り